



営農NEWS



本田初～中期の水管理

水稲の水管理は生育に大きな影響を与えます。田植え直後から生育中期（最高分けつ期ころまで）の管理によって、収量や品質が大きく変わってきますので、管理を上手に行い、多収で高品質な米の生産をめざしましょう。

1 田植え後

- ・田植え後は水深2～3cmの浅水として水温を高め、活着と生育の促進を図ります。低温のときは5～6cmの深水とし、保温に努めます。

多収の基礎は穂数をしっかり確保することです。活着が速やかで生育が促進されれば分けつが増加し、十分な穂数が確保できます。

2 除草剤の効果を高める

- ・薬剤処理後7日間は落水せず、止水管理（田面が露出した場合は、補充分を静かに継ぎ水かんがい）とします。効果を確実にするために、中干の開始までは湛水状態とします。

除草剤の有効成分は、水田土壌の表面に吸着されて処理層を作ります。特に処理後7日間が重要で、早期の落水は除草剤成分の流出や、処理層の形成を不十分にしてしまいます。処理層が壊れないように湛水状態を保ち、水田に入らないようにします。除草剤の効果を高めるポイントについては、「営農NEWS第2687号（3月26日発行）」を参照してください。

3 中干し

- ・田植え後30～40日になったら中干しを行います。期間は5～10日間とし、田面にひび割れができる程度行います。湿田や有機物が多い水田では強めに、水もちの悪い水田は軽く行います。
- ・中干しは、遅くとも幼穂形成期（出穂前30日）までに終了するようにします。
- ・中干しが終わったら、入水と自然落水を組み合わせた間断かんがいを行います。

中干の期間は、気象条件や土壌の違いによって変えます。長い場合は10日以上行うこともあります。梅雨時期にあたるので排水が容易に進まないことがあります。水尻（排水口）を低くしたり、暗渠の水甲を開けたりし、できるだけ落水するように努めます。

中干しの目的は、過剰分けつの抑制と土中に空気を入れて根を健全にすることです。分けつが多すぎると、穂数の増加により粒が小さくなったり（玄米千粒重が軽くなったり）、乳白粒などが多発したりすることがあります。品種によっては倒伏しやすくなります。根の活力が維持されると、養水分の吸収が十分行え、健全なイネになります。

中干しにより土が固まり、収穫機械作業に備えることができ、収穫前の落水時期を遅らすことができます。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



JA全農いばらき

生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040